

第4セッション 総合討論

●コメンテータ

河野泰之(京都大学東南アジア研究所)／弘末雅士(立教大学)／片岡 樹(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)／
速水洋子(京都大学東南アジア研究所)

●討論参加者

柴山守(京都大学地域研)／高谷紀夫(広島大学)／森田敦郎(大阪大学)／西芳実(京都大学地域研)
山本博之(司会・京都大学地域研)

山本博之(司会・京都大学地域研) 総合討論の前に、4名のコメンテータの先生方にコメントをいただきます。趣旨説明でも申しあげたように、これまでのセッションは比較的タイに関するディープな議論や知識を得るところがありましたが、総合討論では、もちろんタイに関する深い議論もするのですが、それだけではなく、タイの動きを離れて、東南アジアの他の地域の専門家の目を通じてタイの洪水をどう捉えるか、あるいはタイの洪水を通じてタイ社会あるいは洪水をどう捉えるかという議論ができればと思います。

■コメント1

河野泰之(京都大学東南アジア研究所) 4点コメントさせていただきたいと思います。最初に、この洪水をどう考えるか、なぜ起こったのかについてお話しします。

私はもともと星川さんと同様に、農業、灌漑排水について大学院まで勉強していたのですが、東南アジア研究所に来てからはずっとその方面をサボっていて、デルタ水利などを研究していたのは1990年代くらいまでで、それ以降あまりアップデートしていません。その古い知識と今日のお話を踏まえてお話しします。

■ 経験値に基づいて形成された輪中が排水機能を果たせなかったのが洪水の原因

おそらく1960年代に、チャオプラヤ川の水利システムが大きく変わりました。それまでは岩城さんが話されたように高床式で土盛りしていて、水路が流れていた。あるいは玉田さんがおっしゃったような、バンコク以外では水はどこへでも流れていくのだという状況は1960年代までの話です。60年代に起こったことのうちもっとも大きいのは、ポンプが利用できるようになったことだと思います。それは揚水灌漑であったり強制排水をするものです。

同時に、社会的には、それまで盛んであった舟運がそろそろ終焉する。それからコメから野菜や果樹、養殖などの多角化が起こります。さらにはもちろん都市化です。このような技術的・社会的条件が重なって、チャオプラヤ・デルタが全面的に輪中化されます。これはけっして最初からマスタープランがあって計画的・系統的にしたものではなくて、とにかくできるところから少しずつしていったわけです。1990年代の半ばから後半くらいの調査で、チャオプラヤ・デルタは31か32の輪中に分割されています。

この輪中は、基本的には灌漑あるいは水利用のためのものです。ただし、同時に排水のユニットとしても使われています。その輪中はそれなりの堤防で囲われていて、そこにポンプ、強制排水あるいは揚水灌漑をする施設を備えているものです。おそらくそれぞれの輪中は、多層的な輪中構造を備えていたと思います。

今回の洪水では、おそらく1960年代以降で最大の水がチャオプラヤ・デルタにやってきた。この輪中システムは経験的に造られたものです。岩城さんのお話のなかに、「そこに住んでいる人はだいたいこのくらいまで水がくると知っている」というお話がありましたが、おそらくそういう経験値に基づいて、どのくらいまで堤防を造っておいたらよいかという理解のもとにできていたので、今回それを超えるような水がきてしまった結果、多くの輪中が機能しなかったということではないかということが、今日のお話をうかがいながら考えていたことです。

■ 不合理な妥協の結果生まれた非統合的で脆弱性が高い輪中システム

二つ目は、ところがこの水利システムは経験には基づいているのですが、統合されていない。あるいは脆弱性が大きい。対症療法の積み重ねです。1990年代に、あるフランス人の専門家が灌漑局に6～7年滞在して

いました。チャオプラヤ・デルタが30ほどの輪中に分かれていることは彼から教えてもらったのですが、そういう目でチャオプラヤ・デルタを見ている技術者は、灌漑局にさえほとんどいないとおっしゃってられます。ですから、けっしてシステムティックに動いているわけではない。かつ、一つの輪中にある操作をしたら隣の輪中にどのような影響を与えるかという輪中間の関係さえ整理されていない状況があります。

そのなかで、輪中の空間ユニットというものは、かならずしも合理性をもったものではない。水の動態からみた合理性と社会的な合理性、地方行政のなかでの合理性、いろいろなものが入りまじってすべての合理性が一致する点はないので、どこかで不合理な妥協をした結果、できてきたものである。

そのような不合理な妥協をした点が、星川さんが紹介されたようなサムワ運河の水門のようなかたちで、水を争う紛争として現れてきたのではないかということが二つめのポイントです。ようするに、現在のシステムが非統合的で、いくつかの脆弱性をもったものである。それが今回の洪水が引き起こした紛争に関する星川さんの議論を少し補うかたちですが、工学的な理解だと思います。

■ 洪水への対応から浮かび上がる 不確実性を前提としたタイ社会の姿

最初に西さんから趣旨説明があった、今回の洪水を通じて災害対応からどのように地域を理解するかに関してですが、今回の洪水について、私自身はきっちりフォローしていません。2012年の3月に、星川さんに連れられて一度だけ現場を見に行っただけです。しかし、ずっと不思議なのは、10月、11月に洪水が来ることは、早くからわかっていました。上流からだんだん、少しずつ流れてくるわけです。それにもかかわらず、備えができていない状況でみんな被害に遭っているのです。

タマサート大学の話が出ましたが、タマサートの横にアジア工科大学(AIT)があって、私はそこに2年間ほど行っていたことがあります。その同窓生のメーリング・リストがあって、11月ごろから、AITがどのような状況かメールで教えてくれていました。ずっと「だいたいぶだという情報を得ている。心配しないでくれ」と知らせてきていたのですが、突然「どうも危なくなってきた」という連絡がきて、2、3日したら「水が入ってきた」という連絡がくるような状況でした。

AITの建物は2階建てが主ですが、1階にあったコ

ンピュータを2階に上げておくだけで助かったのに、それさえできずに1階で被害に遭っている。そんな状況になることは、きっちりシミュレーションをすれば1か月くらい前からわかっていた。なぜそれをしないのか疑問でした。

でも、これはもしかしたら、「災害が起こるかもしれないから」ときっちり準備しても、空振りに終わると無駄になると考える。逆に、準備せずに災害に遭うと大きな損失になる。どちらに重点を置くかというときに、一つの地域の社会の特徴があらわれているのかなと思いました。

日本は起こるかどうかわからない地震に対して準備しようとする。もちろん、それでうまくいくときもあります。それに対してタイ社会では、「ほんとうに起こってからなんとかすればいい」という行動規範があるのかなと思いました。そうすると、今回の洪水は、どこか不確実を前提とした社会という視点で、もう一度タイ社会を見る機会なのかなと思いました。

■ 地域間・セクター間の対抗関係を含めた タイの社会制度を見直す契機になれば

最後の一つは、洪水をめぐる社会的な構図をどう見るか。これは第3セッションで玉田さんと水上さんがきっちり議論してくれたことですが、一般的に水をめぐる紛争に見られる構図は、地域間の対抗関係かセクター間の対抗関係です。

今回の洪水に関しては、赤シャツ派と黄シャツ派とか、民主党とプアタイとかいうのは、どちらも少し違うなという認識を私はもっていたのです。今日の発表をおうかがいして、たとえばバンコクを守るために周辺地域が犠牲になる。これは明らかに地域間の対抗関係です。スパンブリーで防衛するという話もありました。それからパトゥムターニー県の知事更迭事件も、地域間の対抗関係のあらわれです。やはりそういうことがあって、「そうそう、そういうことなんだよ」と思ったのです。地域間の対抗関係がしっかり出たことが、私にとっては本日のセミナーの大きな収穫だったと思います。

それからセクター間の対抗関係は二つの側面で見えました。ダムオペレーションにおいては、洪水防衛、灌漑、水源確保、発電みたいなものがある。それから洪水でも、最後に玉田さんが質疑応答でおっしゃいましたが、都市セクターと工業団地セクターとをどう考えるかというのは、これからの議論です。やはり社会的な構図としては、ここがもっとも重要なポイント

ではないかと思えます。

このなかで、政治的な状況をどう位置づけるかということについては、ずっと聞いているとやはり今日の政治状況が地域間とかセクター間の対抗関係を増長して、その結果、洪水被害拡大の要因を隠蔽し、そして公平で効果的な対策の構築を妨げているということなのではないかと思うのです。

もう一つ、とくに地域間の対抗関係で、バンコク都知事が選挙で選ばれて、近隣のほかの知事が内務省から派遣されているというのは、紛争を地域間の対抗関係として明確にしない要因になっているかと思えます。そういう今日の政治状況ではなく行政の制度自体が、今回の洪水に反映されていると思いました。

ですから、赤シャツや黄シャツがどうこうということも大切かもしれませんが、今回の洪水が、もう少し広くタイ社会の制度などを見直す機会になってくれたらなと思います。

■ コメント 2

弘末雅士(立教大学) 歴史的な観点から現在のタイ洪水の問題についてコメントさせていただきます。

■ 土地の肥沃化、狩猟、漁業、港市の防衛 ——洪水がもたらすプラス面

副題が「災害対応から考える社会のかたち」ということで、私がお題、テーマ自体について考えたことは、そもそもなぜ洪水が災害になるのだろうかということでした。本日の第3セッションでも玉田先生や水上さんがお話しされましたが、東南アジアの前近代においては、洪水はきわめて両義的なものであり、災害とはかならずしも受け取っていなかったであろうと私は思っております。

洪水のプラス面とマイナス面を考えると、プラス面のほうが圧倒的に多いように思われます。まず、氾濫原で農耕を行ないますので、土地の肥沃化をもたらすために洪水は必要なものです。今日もお話が出てきたかと思えます。

17世紀の狩りについて紹介したいと思います。17世紀のイギリス人が記録している、オランダ東インド会社の商館員が現地人を使って鹿や水牛をしとめるお話です。チャオプラヤ川やメコン川での水牛や鹿の捕獲で、雨季の洪水のときに行きません。洪水で増水すれば増水するほど、人びとにとっては獲りやすくなります。前貸しをして、数百人の人びとをこの会社は雇いまし

た。水辺に草を食べにきた水牛を、20日ごとに蹄がなくなって生えかわることを利用して、簡単に獲っていく。

それから鹿も、丘にだんだん水かさが増して追いつめられると容易に捕獲できます。シャムもカンボジアも、多いときは10万枚近くの鹿皮を日本に輸出しております。「そんなことをやっている鹿や水牛がかわいそう」とこのイギリス人は書いていますが、人びとにとっては狩りの絶好の機会でもあります。

それから漁業では、乾期に固定化されている魚の巣が洪水によって解体されるので、日ごろは捕獲できないものが捕獲できるという利点もあったはずですが。

さらには港市の防衛です。そもそもバンコクはアユタヤよりももっと湿地帯なところで、ビルマ軍の攻撃が防ぎやすいということから、この地を選択したわけです。

そのほか洪水が起こると漂着物があるので、それを獲得する。対価を払わないとそれは返さないというのが東南アジアの一般的なルールです。それから乾季のときに臭くなったりゴミでつまったりする水路が、そのときに流される。そういう利点があります。

■ 衛生環境の悪化、伝染病の蔓延 ——洪水がもたらすマイナス面

一方で、ある人は得をするかもしれないけれども、人的・物質的な損失が出る場合もあります。とりわけ洪水のいちばんのマイナス面は、それが引いたあとに衛生環境が悪化することです。

島嶼部のバタビアの例を見ておきますと、オランダ人にとっては、洪水は起こらないに越したことはない。雨がコンスタントに降って、予想を超えるような量であってほしくないということはありますが、運河が詰まっている状態を開放してくれるのはいい。そのあと乾季になって、いろいろなゴミや排泄物がたまって臭気をもたらすのが健康に悪い。そこが彼らにとっては決定的な問題で、それで病気になり、伝染病が発生し、人口が減少することが問題になっています。

■ アユタヤの建国神話と スマトラの創生神話に見える洪水

アユタヤの建国を語る『シナム王統記』、17世紀にファン・フリートが当時のアユタヤの人びとから採集した話ですが、疾病をいかに制するかが語られています。それによると建国者となるウートン王が、「水の力を司る龍がいて、水運のよいところのだけれど、ヨダレを口から吐き出して住民を殺してしまう。この龍をなんとか制することができればアユタヤに建国で

きる」と隠者から告げられて、ウートンがその隠者を池に投げ込むと二度と龍はあらわれてこなかったと書かれています。そして牛の糞のかわりに米の粉を身体にぬることで、ほうそうがなくなることを人びとに示しました。以後、アユタヤは繁栄する王国になったと王統記は語ります。

そのほか、スマトラでは水の力が世界を構成する二つの要素の一つと了解されております。はじめに、天界と地界が存在していました。地界には「ナーガ」が存在しており、彼が首をふると水ばかりになり、また地震が起きます。天界よりバタラ・グルの娘が土を贈ってもらってナーガと格闘し、地上世界を創世する。これが創世神話です。オランダのライデン学派の構造人類学の解釈では、これは天界と地界を象徴する両者の聖なる格闘であり、性的行為も含むものであると考えられています。ナーガを一元的に制圧するものではなく、異なる世界の二つの補完しあう原理の相互作用によりこの世界が成立していると分析されています。

■ 洪水より日照りと衛生環境悪化を問題にしたオランダ東インド会社

前近代においては、洪水よりも圧倒的に日照りのほうが問題です。オランダ東インド会社は、日本貿易、東アジア貿易で、鹿皮をはじめ、漆など貴重な産品が入手できました。ラオス商人も、アユタヤまで約1,000キロメートルの道を往復2年半かけて交易するよりも、メコン川をとおしてオランダと交易したほうがはるかに効率がよいということで、オランダを招いたわけです。

しかし、その帰り道、ラオスからカンボジアに帰るときになると1941年11月24日にラオスのヴィエンチャン近郊のムンコックを出発して、帰るときには川の流れに沿ってということになりますが、カンボジアに4月11日についた。つまり水量が例年以上に少なく、それに手間取ってしまいました。あまりにも日数がかかるので、オランダはラオスに行つての交易はやめにしようと決定しました。そういう意味では、洪水よりも日照り、そして洪水の後に起こる衛生環境悪化が前近代においてはより重要な問題でありました。洪水はそんなに問題ではない。むしろ欠かせないもので、起こってくれるほうがいい。

■ 洪水はいつから、なぜゆえに邪悪なものと措定されたのか

それでは、近代になってなぜ洪水がこのように悪者になっていったのか。今日もこのお話がなされておりました。岩城さんのお話のように、20世紀に入ってか

ら土地開発に重要な意味が出てくる。そして陸上交通が発達する。また先ほど河野先生のコメントにありましたように、とりわけ1960年代ころから舟運が後退して陸上輸送がどんどん発達する。そういうことになると、どうしても水を制することが決定的に大事になってくることがあります。

そういうなかで、かつては定期的に洪水を起こしていたものが、もはや洪水というものを——玉田先生のお言葉では「邪悪な対象になる」ということおっしゃいましたが——そのように措定せざるをえなくなってきた。しかし、邪悪と設定して、それを解決する道はあるのかと考えますと、これは極めて難しい戦いを続けていると感じます。

岩城さんから発表があったとおり、私はけっして過去を美化して歴史把握をしようというつもりはありません。むしろ洪水とは仲良くつきあったほうが、はるかにいろいろな活力が生まれるのであって、それを邪悪なものだけとして対応していくと、袋小路に入って解決口が出てこないと思います。

そして最後に玉田先生がおもしろいことを言いました。そういうなかで唯一、人びとの依るべきところが王の意向ということです。これは考えてみると、前近代において、人間だけでなく自然界のすべてを統べるのは王権ですので、やはり最終的にはそういうところに求めざるをえないのかなという現代社会のおもしろい側面を感じました。長くなりましたが、コメントとさせていただきます。

■ コメント 3

片岡樹(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科) 私の調査地であるチェンライ県の標高は1,200mあって、洪水についていっさい考えたことのない場所です。とものを考えてきております。ですから、この分野の知識がございません。

先ほど河野先生から農業土木を踏まえ、弘末先生からは歴史を踏まえた専門的なレベルの高い要約をしていただいたのですが、私は残念ながらそれができません。「この問題に関しては、そもそもすべてのパネリストの知識を下回るレベルですので、だれそれにコメントすることは不可能です」と言って断ろうとしたところ、「タイ研究者として大きな絵を描いてみなさい」と言われたので、それに背中を押されたつもりで素人の与太話をさせていただきます。

■ タイ社会を理解するうえでの キーワードとしての「水」

今日の予稿集をもらって、古い本のことをつらつら思い出しながら、にわか勉強をしてみました。ところで、先ほど弘末先生から「水」というキーワードが出てきましたが、たしかにタイ社会を理解するうえで、水は重要なキーワードであったことに気づかされるわけです。

新しいところでいうとGMSの問題です。GMSとは「Greater Mekong Sub-region」ですが、水でつながる新しい地域。しかも水でつながる地域のなかで、メコン川の水が減ったのは中国が悪いの悪くないのというような、水をめぐる争いがなされていたりもするわけです。

それから、山地と平地の問題もあります。渇水になったり鉄砲水になったりするの山地民が悪いのか、それとも山にやたらとゴムのプランテーションを植えるやつが悪いのか、それとも安易にコンセッションを出す森林局が悪いのかといった犯人さがしが、ここ10年、20年ずつと行なわれてきています。ここでもやはり水がキーワードになる。

もう一つ、「会党と錫と水」の問題があります。「会党」とは中国人の秘密結社のことです。どちらかといえば山本先生のほうが詳しいのですが、パンコール協定でマレー半島の植民地化を決定づけた事件は、そもそも水から起こっております。中国人秘密結社どうしが錫を洗うための水の縄張り争いで武力衝突をして、そこに英軍が乗り出していったということです。

それはマレーシアの話だろうと思われるかもしれませんが、この事件をきっかけに、シャムとしても南部をかためなければいけないというかたちで海峡植民地型社会を、シャムの王室のコントロール下に人為的に導入するわけです。ここでも水がキーワードとなり、これもタイとマレーシアをつなぐ大事なファクターになるわけです。

■ 水利のコントロールが権力を生む ——石井米雄先生の分析

水からタイを論じるときに思い出す本が、『タイ国——ひとつの稲作社会』（創文社、1975年）です。だいぶ古いものですが、このなかの「歴史と稲作」で石井米雄先生が示されているモデルがあります。みなさんよくご存じだと思いますが、くどいことを承知で簡単にくりかえします。

一つは「古代的」国家と言います。これは時間的な古

代というよりは盆地です。排水域での工学的適応、用水の支配、つまり水利のコントロールが権力を生み出したのだというモデルが出されてくるわけです。

古代型の場合はスコタイなどが想定されているわけですが、アユッタヤーのような氾濫原に出てきた場合には、水への人びとの対応が農学的になる。これは浮き稲のことを言っています。したがって、農業への干渉によって国家が権力を担保するのではなく、そうしなくてよくなった国家が農業の余剰を取奪して売りさばくことによる「商人王」国家が出現するのだというような図式を示してきました。

古代、中世ときたら近代ないし現代が当然出てくるわけですが、この点に関して石井先生は、この論文のなかではかならずしも多くは語っておりません。デルタ下流部——これはトンブリー、バンコクですが、そのなかにプランテーション型輸出農業がボウリング条約以降出現することによって、もう一つ新しい歴史のページがめくられるのだということになります。このあたりまでくると、だんだん水が参照点ではなくなります。

■ 水上から陸への移動の過渡期を論じた 坪内良博先生の議論

次は古い本でなく新しい本ですが、『バンコク1883年——水の都から陸の都市へ』（京都大学学術出版会、2011年）という本があります。かつてヨーロッパ人からは「水生民族」などと言われたこともあったらしいですが、筏の上に住んでいたバンコクのタイ人たちが陸に上がっていく過渡期を歴史資料を使って活写している本です。河川沿いの集落から道路沿いの集落へと、人びとが陸に上がりはじめた様子が書かれています。

著者の意図とは関係ないのかもしれませんが、これを読んでいておもしろいのが、バンコク中心部の道路沿いの家はほとんどが王室財産局の投資物件であり、このころから陸に上がったタイ人の先頭を切って王室が地上げ屋と化していく。お手盛りに投資をして、そこに道路を通して地価の上昇を図って、そこに店子を入れて荒稼ぎをすることが見られるようになっていったとあります。

■ 「商人国家アユタヤ王朝」仮説についての 原洋之介先生の評価

ところで、我々のような1990年代に院生生活を送った者にとっては、このあたりの論文を興奮して読んだ記憶があるのですが、経済の原洋之介先生が石井米雄

先生の論文を高く評価して「これは日本、東アジア、東南アジアの比較研究のたたき台としておもしろいんだ」と激賞している論文が、『商人国家アユタヤ王朝』仮説について——東南アジアからの知的冒険(『東南アジアからの知的冒険——シンボル・経済・歴史』、リブポート、1986年)です。生態に学んだ歴史学の石井先生、それにさらに経済の先生が参入して水を出発点としたところから、タイ社会を切り口に刺激的な議論を展開しています。

原先生は「東洋的専制国家モデルの相対化」というところで石井論文を高く評価するわけです。そこからさらに経済史的にもう一步、二歩、踏み込んで議論したらおもしろいとして、人の支配から土地の支配への転換、あるいは経済的集権化と分権化の相剋というファクターをもちだしてくる。そうすると、この論文では石井先生の生態史観を激賞しているのですが、出口の部分では事実上水が消えていくわけです。

■ 国家と自然との相互作用は変わっておらず見えにくくなっただけではないか

というわけで、どうやら水で天下国家を語ることは、近代以降語りにくくなってきている印象があります。これはもしかしたら水利や農業土木を研究されている方にとってはそんなことはないのかもしれませんが、少なくとも文系の私にとってはそうでした。

しかし、今日のコメントを準備するにあたって、玉田先生が参照されていた論文(『洪水の前における平等』)のなかにおもしろい言葉がありましたので引用します。

水というのは、政治家たちの二重基準を理解しない。つまり「水に沈んではいけないバンコク」と「水に沈んでもかまわないパトゥムターニー」とのあいだに、そういった人間たちの基準を理解しない水が無差別に流れ込んでくる。そこで、民主化されつつあるタイのなかで浮上してくるのは「水の前における平等」という新たな争点だということです。

そうすると、水と天下国家は離れていたのではなく、たんに我々から見えにくくなっていただけなのではないかということをおもひ出させてくれたのが、今回の事件だったのだとつくづく思い知らされるわけです。そうして思い知らされてみると、これまで10年少々ずっと言われてきた「パーチュムチョン」、共有林法をめぐる問題も、じつは水を肴に天下国家を論じていたのだということをおもひ出します。

というわけで、国家が自然との相互作用のなかで生

きている、活かされているということ自体がじつは前近代も近代もないわけで、そのこと自体は変わっていないのですが、現在ではとても見えにくくなっている。では、存在するのにも見えにくいものを見えるようにする言葉をいかに編み出したらよいかなのというのが、今日みなさんのお話を聞きながら感じた私自身の宿題です。

■ コメント4

速水洋子(京都大学東南アジア研究所) 私は大きく二つ申しあげたいと思います。質問というよりは感想でありコメントになります。

一つ目は、今回みなさんの予稿のようなものを読ませていただいてもっとも目に焼き付いたのが、今回の洪水で明らかになった、あらわになった、バンコクを線的に囲い込んで守る図式です。

星川さんが発表で紹介してくださった、1983年に輪中堤ができて囲い込まれて、かつそれによって水路までも遮断しているという事態をぜんぜん知りませんでした。私のように知らない人間にとっては、ほんとうにそれがまさに可視化したのが今回の洪水であつたらうと思います。

■ 線で囲われ守られるバンコク都は洪水対策のなかで生まれた

洪水が恵みであつたのが害として捉えられるようになり、そこで洪水対策がなされるなかで、ではバンコクの都市とはいったいなんなのだろうか。これは星川さんや柳澤さんのコメントにも出てきましたが、都市とその外側という関係が問われてきているということをまず強く思いました。

それは都市とその外側という単線でもない。先日まで東南研におられたパースック・ポインパイチャット先生が半年ほど前に来られたときに、「お家はだいたいどうぶでしたか」と話をすると、「私の家は王女の家近くにあつて、幸い土嚢が積まれて守られたところでした」と居心地が悪そうに説明されたのです。

ですから、単線的に堤によって守られたのと同時に、都市の中にはある種守らなければならない地区があつて、そこに土嚢によって分断が生じるために、その土嚢を崩そうとする人がいる。都市の中でも分断が生じているので、かならずしも内と外というだけの単純な構図でもないのです。

そういう頭の中に焼き付いた図を思いながら思い

出したのが、片岡さんが紹介された坪内良博先生の本です。1883年の郵便家屋台帳を分析したもので、「水の都から陸の都市へ」という副題です。

そこで坪内先生は「城壁で住民全体を囲い込み、保護するという思想は、バンコクを建設する時期には存在しなかった」と書かれています。ビルマの侵略を念頭に建設された城壁都市ではありましたが、その脅威が現実のものではなくなった時点で城壁都市としての性格を失い、あとは放射状に広がった。水路と陸路、主に水路をたどって放射状に広がった。

しかも、今日の岩城さんのお話のように、放射状に広がるなかには農業的な要素とか、官吏も住んでいたり、いろいろごちゃ混ぜの状態に広がったのがバンコクであった。坪内先生は、人口学で都市人口を数えようとした人に対する反論として、ヨーロッパ的な概念でバンコクという都市を考えたら大間違いをするだろうと結論されています。

そのように、王宮を中心としつつ、求心的なまとまりを形成した拡がりがかんたん拡大してバンコクができた。それが岩城さんの話にあったように、1900年代そして1960年代に急に大きくなって、まさに街区といえるようなまち、人口が密集する地区がそのなかでできた。その過程を考えると、今回の洪水でも1983年の洪水でも見えたことですが、なんらかの線で囲い込む都市というのは、洪水対策のなかで出てきたことなのかなと思いました。

また、先ほどの河野さんのコメントにもありましたが、その都市の外にあるものと中にあるものがどう折衝していくのか。工業地区が外にあり、中にはもちろん王都があり、スラムも商業地区もあり、交通の要衝もある。この内と外をこれからどのように折衝していくのかというときに、バンコクの都市をこれからどのようにプランニングするのか、都市をどう考えるのかが、洪水の対策に大きく関わるだろうと思いました。まさに堤を造って守ろうとするところから洪水が害となるというか、両方が促進されていく過程であったのではないかと感じました。

■ 洪水後のタイに 新たな都市コミュニティが生まれる可能性は

もう一つ、西さんが人のつながりを作る点もあるとおっしゃっていました。私自身も、家族とか小さな単位、親密圏と言われるような目に見える関係のなかで作られる人のつながりによって、高齢化するタイ社会がどう支えられるか、それと同時に、そこからどのよ

うに拡がりができるのかという、ケアを支える社会的基盤に関心もっています。そうしたときに、やはり都市ですと、なんらかの都市コミュニティが考えられると思います。

今回の洪水について、今日は外国人労働者の話はありましたが、一般の都市に住む人たちがどのように対応したのかという話はあまりなかったので、少しだけご紹介しようと思います。

10月ごろだったと思いますが、『ネーション』紙に出していた記事で、バンコクの西側、バーンラカムで2006年に洪水被害が起こった。これに対して、コミュニティのリーダーたちがローカルな次元で洪水対処計画を作った。政府の助けを待っていても何も得られないことが2006年の事件でわかって、近隣コミュニティが集合してどのように準備し、緊急対策をし、避難をし、復興するのかプランニングしたという話が載っていたのです。

避難計画や護岸建設によって避難路である道路をどのように確保するかとか、過剰になった水はどのような順番で農地に放水するかなどについて、そのコミュニティだけではなく近隣県とのネットワークを作りながら対策をしていったという話でした。しかしこれは10月の『ネーション』で、その後西側の洪水がひどくなって、これがどれだけ機能したかを私はフォローできていないのでわかりません。

そういうかたちで、最後の話に少し出てきた、王室が庇護すべきで、庇護されるからには我慢するみたいな構図に対して、タイは現在変わってきているのではないか。そのなかで、そういったいろいろな動きも、ひょっとしたら今回の洪水のあとたくさん見えてくるのではないかと、この記事を見て思っています。

■ 討論

山本 4人の先生方からいくつかの論点が提起されました。これに対して、フロアの参加者のみなさんからご意見やコメントをいただきたいと思います。

■ 洪水を困難と受け止めず 被害が予想されるのに動かないのはなぜか

柴山守(京都大学地域研) 2011年の12月、バンコク連絡事務所に1か月と少し滞在をいたしておりました。それで毎日のように3チャンネルの報道を見て、非常に複雑かつ一方で楽しみました。それがけしからんとある人はおっしゃいます。

じつは報道を通じて三つのことを感じたのです。まず3チャンネルの報道は、どちらかというとフォーク・ソングで始まってフォーク・ソングで終わる。その中身がとてにこやかでした。洪水に遭って家にたどりつけない人がいるところを舟で行きつつ、にこやかな場面を常時映しています。いったいそれは何か。しかも政府のとった対応については、あまり報道されないのです。だいたい8割が「ここは水に浸かった。そこではこんな救援物資が送られた」ということで、いったいこれはどうなっているんだと思いました。

私がそこで感じたのは、マスコミが協定を結んでそのようになっているのか、そうではなくて表裏一体で、もともと楽しく、それほど困難と受け止めないようなキャラクターなのか。素人ですからそのあたりはわかりませんが、どうなのだろうかと思いました。

二つ目の問題は、その駐在に先だって、11月20日だったと記憶していますが、ドンムアン空港に行きました。ここは救援本部だったのです。そこで炊き出しをしていて、水などの救援物資が運ばれてきて、通常路線バスが救援物資を運ぶトランスポーターションになっている。話を聞いてみると、どうやらそれはボランティアであるということでした。

そこから見えてくることは、先ほど河野さんの話にもあったのですが、その6日後、11月26日には水がきているのです。先ほどAITのお話がありましたが、政府あるいはAIT、タマサートは、水が来ることはわかかっていて、なんで早いこと気づかないのか。逆にそれが信じられないですよ。それは政府のもめごとの発端でそんなことになったのか、もともとの考え方に問題があるのかということでした。

■ 個々の判断で動き、組織性が見えない対策はタイの国民性に由来するものか

柴山 もう一つ感じたのは、バンコクのスクンビットの周辺では、洪水への対応はまちまちでした。たとえばあるホテルで2mくらいの高い土嚢を積んでいるところもあれば、なんの対策をしていないところもある。それをずっと観察していると、どうも洪水から守る行動は、それぞれの個人の考え方に基づいているのかなと思いました。

つまりどういうことかということ、先ほど救援物資のトランスポーターションの話をしたのですが、それぞれの企業ないし個人がそれぞれ自らの世界で、それをよく捉えるか悪く捉えるかはそれぞれの判断にまかされていて、その地域コミュニティの横のつながりのよ

うなものがないのではないかと強く感じたのです。

これは放送局の3チャンネルもそうなのです。3チャンネルの報道を見ていると、自分のところの救援物資のことで、あの眼鏡をかけたキャスターがいつも出てくる。「3チャンネルはがんばっているよ」と。5チャンネルに替えると、5チャンネルも救援物資が出ている。そのなかに共通して映っているのは、プミポン国王が出された救援物資です。濃紺の袋に白地で書いた、そんなものを撮って放送している。これが私にはとてもおもしろい光景に見えました。組織として物事が動いているようにはどうも見えない。

それは東日本大震災での日本の報道とくらべると、明らかにまったくダイレクションが逆のように私の目には映るのです。フォーク・ソングみたいなものは、日本の放送局ではどこにも見られない。そのあたりは、洪水そのものと仲よく付き合ってきたと諸先生が言っておられる——国民性とまで言えるかわかりませんが、そうした自らのなかにもっている国民的というかタイ人としてのカルチャーのなかに対応があって、それがあまり組織化されない。バラバラに対応している。どうも私からみると、構造的な感じがしない。

それぞれの労働者がいろいろなところでいろいろな仕事をやっていますが、賃金や労働形態や会社の組織をみますと、会社とか個人がそれぞれそうしたものには対応するのだということであって、日本の対応の仕方とは違うのだなと思いました。とくに文化の面で、そのあたりをどのように見ればよいのかお教えいただければありがたいです。

山本 先ほど4人の先生方からいただいたコメントには、どうして大雨が洪水になったのか、それがどうして災害と捉えられるようになったのか、あるいはタイ社会の災害対応をどう理解すべきかというお話がありました。いまの柴山先生のご発言は、タイ社会の災害対応をどう理解すべきかということについて、国民性やカルチャーと関係があればおうかがいしたいという質問だと思います。

■ 医療の進展による死亡率の低下が洪水への気楽な対応を生んだのでは

弘末 歴史研究の立場から、ご質問に対して感じるものがなかったので、お話しさせていただきます。

私はインドネシアを専門に研究していますが、現在では、タイ人だけでなくインドネシアの人も、洪水に対して割合気楽な対応をしているように思います。おそらく18世紀くらいまでの人びとのほうが、洪水に対

してもっと慎重な対応をせざるをえなかった。それは20世紀に入ってから衛生環境の悪化に対する医療の進展があって、死亡率がだんだん下がったところに大きな原因があるように思われます。それで人びとの間に「洪水がきても死ぬことはない」という——以前はそれが死活問題になるぐらい重要なファクターだったと思うのですが、それが去った時点で比較的気楽に対応できるのではないかなというのが私の解釈です。

■ 洪水報道で流れたフォーク・ソングをどう解釈するべきか

片岡 答えになっていないと思いますが、触発されて思ったことを思いつきに話します。一人ひとりがそれぞれ行動して、そしてフォーク・ソングで「サバイ、サバイ」というかたちもあると思います。ひょっとすると、こういう角度から見ると違うかなと思うのが、たとえば中国系の慈善結社の活動を見ると、そこからはまた別のかたちで下からの公共圏のようなものが構想されている可能性もあるなと思いました。

水上 おそらく今日の参加者のなかで、私が大洪水の最中に一番タイのテレビを見ていたと思います。常にチャンネルを替えて、3チャンネル、5チャンネル、7チャンネル、タイPBSと見ていましたが、テレビ局によって非常に雰囲気の違いがありました。

特に民法の3チャンネルは、最初のころは他人事のような気楽な感じで「アユッタヤーが水に浸かりました。みなさん支援をよろしく」といった感じでした。しかし、バンコク周辺にまで水が達したころには、3チャンネルも深刻な雰囲気になっていました。バンコク都とパトゥムターニー県の境界辺りの各地で住民対立が発生していましたが、そこにソラユット・キャスターが駆けつけて、殺気立って喧嘩中の住民の要望を聞いて、それを必死になんとか解決しようとするといった内容に変わっていきました。

一方、独立系のタイPBSは、地上波局ではもっとも洪水報道に力を入れていました。一日の放送時間のほとんどが洪水のニュースでした。常にシリアスな感じで、洪水の専門家が出てきて解説をしたり、洪水被害状況の実況をしたり、割と淡々とやっていました。ただし、「タイ人は団結してこの危機を乗り越えるんだ」というナショナルスティックなメッセージが番組の合間にくりかえし流されていたことが特徴的でした。

陸軍系の5チャンネルでは、「陸軍がすばらしく活躍している」みたいな報道が多くあって、政府広報局のNBT(11チャンネル)は、政府の発表を流し続けてい

ました。メディアの対応はずいぶん違うものでした。お気楽な雰囲気醸し出す報道も一部の局ではありましたが、全体として見ると、最初は気楽でも、バンコクに水が近づくにつれてシリアスに変わっていったとの印象を持ちました。

星川 的確かどうかわかりませんが、2010年5月19日の強制排除のあとも、そういうフォーク・ソングが流れました。あれは、「サバイ、サバイ」というよりも、住民どうして対立が起こって、社会が分断されようとしているときに、「タイ人はみんないっしょだよ」という意味で、ああいうものが流れるのだと思います。ですから、「サバイ、サバイ」とはある意味逆の状況で、「タイ人はいっしょだよ」という電波を送る、そういう役割のものをご覧になったのではないかと思います。

■ タイのアカデミズムは、洪水をめぐってどのように機能したのか

高谷紀夫(広島大学) 私のフィールドはミャンマーです。予備知識が十分ではないのですが、今日うかがっていて、灌漑局長、農業大臣の話が出てきましたが、いわゆる専門家がメディアのなかでどのような役割を果たしたのかについておたずねします。農業大学とか大学の専門家の方がたが、どのような役目を果たしたのか。先ほどの河野さんの言葉でいえば、専門家どうしの対抗関係みたいなものがあつたのか。タイのアカデミズムのなかでは今回の洪水にどのように関わっていたのか。

また、タイのアカデミズムのなかでの専門家の位置づけとか、専門家どうして意見対立があつたのかとか、水門を開ける・開けないで意見の違いがあつたとか、それがメディアでどう扱われたのかということ、タイの専門家の方にぜひお聞きしたいと思います。

星川 それはまさに百家争鳴の事態でした。何人か有名な人が出てきたのですが、ある専門家が「幹線道路を水路として流せば早く水が引くのではないか」と言う、べつの方は「そんなものは意味がない」と言う。ある人が「幹線道路がチャオプラヤ・デルタを横切っていることが排水を妨げているのだから、それを開削して水を流せばいいのではないか」と言う、ある人は「それには意味がない」と言う。またある人は「土嚢を崩してもべつにバンコク市内の水位には影響がない」と言いますし、ある人は「影響がある」と言う。マスコミのなかで相互に百家争鳴をくりかえしていたという印象です。

河野 それは大学の先生や灌漑局の技術者ですか。

星川 灌漑局の技術者はあまり議論の表には出てこなくて、大学の教授や財団の人が出てくることが多かったという印象です。

■ 自然と社会とが渾然となった問題をあらわにした洪水

森田淳郎(大阪大学) 主に片岡さんが話されたことに関して、付け加えさせていただきたいと思います。

タイ研究の進め方として、生態学的なアプローチも、けっこう文系の研究者でも多くの人がしていると思うのです。ただ一方で、近代化していった、人類学の場合だと研究対象も農村から都市側に興味移って、自然とのつながりもだんだん視野に入らなくなっていったのではないかということは、片岡さんのおっしゃる通りだと思います。

今回の水害は自然の問題でもあるのですが、一方で今回の洪水が起こってあらためて気づいたのは、工業団地がもともとあんなところにあるのはおかしいと思うのです。チャオプラヤ・デルタの空間自体が、高谷好一先生の『熱帯デルタの農業発展』などに書かれていたように、歴史的にもともとあった生態、景観を大幅に改変してあのようになっているわけです。

今回の洪水は、もちろん自然の要因もあるわけですが、複雑にできてきた灌漑網とか技術、社会制度——たとえば王立灌漑局の制度とか、彼らが歴史的に蓄積してきたテクノロジーとか、そういったものがいわば景観に刻み込まれている。そういうふだん社会学者とかが見る、社会生活のバックグラウンドになっているような技術と自然と社会とがごちゃ混ぜになったような、そういうものをあらわにするイベントだったのではないかと感じるわけです。

私自身も、そういうものを捉えたいと思っています。専門は社会と技術の発展で、もともとそういうことに興味をもっていました。運河とかダムは社会のインフラストラクチャーですが、そのうえで社会生活を営むために作られている技術的・自然的・社会的な構築物が、このようなイベントを通してあらわになる。そこを探究することは、自然と社会との両方を視野に入れた研究プログラムの継承という意味でも、可能性があるように思っています。

このように、ふだんはバックグラウンドになっているインフラストラクチャーは、それ自体が政治的・技術的・社会的な要素をはらんでいます。日常生活では、たとえばチャオプラヤ・デルタに32の輪中があるとか、あそこが堤防になっているということは気づかない。

そういった部分が、このような事態で可視化される。そこに注目することも一つの試みかなと思います。

山本 いまのご発言に関連して、このワークショップの企画者の1人である西さんから、これまでの議論を聞いて、災害からタイ社会のかたちをこのように見たらどうかという問題提起をしていただきます。

■ くりかえし、やり直しが可能で修復を前提とするタイ社会

西芳実(京大地域研) 私自身はスマトラを専門としています。趣旨説明でもお話ししましたが、スマトラの大きな特徴としては、災害が起こったときに、どんどん自分たちのかたちを変えていってしまう。職業も変えるし、住まいの形も変える。変えることのうちには移動することも含まれていますから、災害が起こったときに住んでいる場所自体を変えることがあります。

それに対してタイの場合は、まったくそれと違うような気がします。その場にとどまっているし、家が浸水したりするのですが、その形を維持したまま修復しようとする。これはなんなのかということが最初から疑問で、今日お話を聞きながら、それがどういうことなのかを考えていました。

そのようなタイのあり方を見ていると、もしかしたら、やり直しやくりかえしが可能な社会という特徴があるのかなと思いました。洪水がくりかえし、しかも広い範囲で起こるから、洪水が必ずきってしまう状況があることが一つです。つまり、どこかに移動したからどうなるものでもないという状況があるなかで、定期的に必ずくる、だからあえて移動までしなくても、その場でその形を維持したまま、やられてしまってもやり直す。くりかえしくるけれど、くりかえし同じように対応するというかたちがあるのかなと思いました。

ただしもう一方で、岩城さんのお話を聞いていますと、バンコクの都市のかたちがどんどん固まってきてしまっていることも、じつは大きなファクターとしてあったように思いました。王室が率先して土地開発を行なったために都市のかたちが決まってしまう、区画が決まっていった動かせなくなってしまうという状況があるということです。以前なら水がきてもみんな受け入れていたけれど、水をみんな受け入れることができなくなって、外に出してしまうようになる。新しい要素が加わってきているように見えました。

このような状況を見て思ったのは、もしかしたらタイは伝統的にくりかえしやり直しが可能で、修復を前提としている社会で、その裏側でそういう状況を支え

ているのが玉田先生のお話だと王様だということになります。王は動かないし、王もいっしょに水浸しになっているし、王の裁定ならしかたがないという考え方が一方であって、みんなくりかえしやり直しをしていこうという社会になっていたということかと思いました。

■ 伝統的なタイ社会は、矛盾の排出なしに維持できなくなりつつあるのではないか

西 その一方で、バンコクの都市化が進むなかで、そのくりかえしを支えている仕組みは、王の裁定だけではなくて、じつは「矛盾があったときに外に出す」というパターンができてきていたのかなと思ったのです。この場合は具体的には水です。

今回の災害の意味を考えたとき、外国人労働者の話と企業の話が出てきたことは象徴的かもしれないと思いました。今日いろいろな報告者がおっしゃったのが、水をバンコクの外に出したことで、外国の企業から大きなクレームが出るような事態になったということでした。これまでだったら矛盾を外に出して問題がなかったけれど、外国という新しい外の世界の基準に照らし合わせて問題だと言われる状態を招いているということですよ。

外国人労働者に関して、今回はお話を聞いているとあまり大きな問題にならなかったように見えるのですが、もし外国人労働者がたくさん亡くなったら、おそらくこれまでのようなタイの対応で、合法、半合法と不透明なところを作りながらうまく調節していて、帰りたいと思ったら帰っていい、何度もくる人も基本的には受け入れるという状況ではすまなくなって、「外国人労働者がたくさん死んだじゃないか」と国際問題になったかもしれないと思います。

そういうわけで、もしかすると伝統的にくりかえしやり直しが可能だった社会のあり方が、どこかの時点で、たとえば矛盾を外に出すというようなことをしなければ維持できなくなっている。そして現在はその矛盾を外に出すかたちでも、もしかしたら維持できなくなっているかもしれない。そうなったときに、王国として造られてきたタイのあり方がもしかしたら問い直されるのかもしれないという話にはならないのかなと、お話を聞いていました。

山本 いまのお話は、タイの専門家ではなくインドネシアのスマトラを専門とする西さんが、災害対応を切り口にタイ社会がどう見えるか、そしてそれをどう捉えることができるかを仮にまとめたものです。報告

者やフロアの参加者にはタイの専門家がたくさんいらっしゃいますが、この捉え方に対してどのようなレスポンスがいただけるのでしょうか。

■ 逃げられないのは貧乏人だけで地位や境遇に応じた対応がみられた

玉田 やり直しが可能な社会なのかなとおっしゃった点に関してですが、洪水が起こったときに、金持ちはみんなバンコクから逃げました。逃げられないのは貧乏人だけです。貧乏人は水に浸かった家をまったく新しく造りかえるとか、別の場所に移ることは難しい。金持ちだったら、また造りかえる。

日本人からすると不思議なのは、水に浸かりそうな場所のマンションが値上がりしているようです。エリアそのものは浸かる、地面は浸かるかもしれないけれど、平家と違って、マンションなら大丈夫というので値上がりしているというのです。自分はばかげていると思います。

より具体的な例を出すと、自分の大学院での教え子の一人がバンコクにいます。お金持ちですから、一戸建ての自宅がパトゥムターニーとノンタブリーとバンコクに3軒あります。パトゥムターニーは本宅だったのですが、瞬く間に水に浸かったそうです。バンコクの北のノンタブリーのパーククレート地区の自宅に移りました。そこは最終的には浸水しなかったのですが、チャオプラヤー河に近くて「ここもやばいだろう」というのでバンコクに逃げた。バンコクがダメだったらさらにほかのところに行く予定だったのですが、幸いバンコクは守られた。これは金持ちのパターンで、ふつうの人はそうはいかない。別の知り合いの大学の先生は、バンコクが洪水の危機にさらされている時期にはチェンマイに逃げていました。

みんなが一様に息を潜めて洪水を待ったわけではありません。それぞれの地位や境遇に応じて対処しました。ほんとうの金持ちだと海外に逃げました。中途半端な金持ちはパタヤとかホアヒンとか、あまり遠くないリゾート地に逃げて長期滞在していた。金持ちはそのようにして逃げています。けっして誰もが同じように、昔のままでやっているわけではないということが一つです。

■ 不可抗力で避けようがない洪水について責任追及から逃れるために王室を盾にする

玉田 もう一つは、バンコクがある意味で硬化化しているかもしれないということをおっしゃったのですが、自分が先ほど申しあげたことがひょっとすると誤

解されているかなという気がしますので、もう一度、自分が申しあげたことを述べさせていただきます。

洪水は、はっきり言って、対応のしようがありません。「洪水がくるとわかっているのに、逃げもせず対応もせずやられた、ばかだなあ」と思う人が少なくないかもしれません。あらかじめわかっていたら逃げることが可能でした。しかし、たとえば急ごしらえで堤防を造ることは事実上無理です。簡単に止められるような水量ではありませんでした。

たとえばナワナコン工業団地では、日本企業が多いからではなく、有力陸軍退役幹部が理事長なので、軍隊を動員して本気で高い土塁を積んだのですが、一気にやられておしまいです。つまり、洪水の襲来はわかっているのに、逃げられるだけであって、防ぐことは難しい状況であった。政府としては不可抗力なわけです。

不可抗力なのだけれども、「おまえら政府が悪いのだ」と言われたときの逃げ道として、「これからは王様のおっしゃるようにしますから」と主張すれば批判を免れることができる。王様の洪水対策が正しいとは限りません。しかし、王様は批判されないで、「王様のおっしゃるとおりにします」と言えばだれも批判できなくなる。政府は王様を盾にしているということです。

水上さんご紹介された委員会というのはまさにそのとおりで、王様の側近が入っているけれど休眠状態だとおっしゃいましたが、それはそれでよいのです。まったく問題なしです。大事なことは王様の助言を実践することではなく、お守りにすることです。もっているだけで批判を免れることができる。そういう役割を王室は果たしている。逆にそのことが、おそらくもっと柔軟な対応や変化を妨げているという意味で、マイナスになっている面があるという気がします。

もう一点は外国人労働者の件です。これは西さんもお存じのとおり、アチェの地震のときに、ものすごくたくさん外国人労働者がタイで死にました。多くは無縁仏です。身分証明書がないのでわからない。タイ人だったらだれか引き取りにきます。しかし、外国人労働者の場合には入国、滞在、就労が不法なものが少なくない。引き取り手がなければ無縁仏扱いです。今回の洪水とは比較にならないほどの人権問題がそのとき起こっていたと思います。

■ 逃げ出した富裕層の行動原理と 不動産価格の現状

山本 王様のことについては、「支えているのは王様だ」と西さんが言ったのは、「よくも悪くも支えている

のは王様だ」という意味で言ったのでしょから、いまの玉田さんのお話とそれほど違わないように思いましたがいかがですか。

西 そう思います。

また、金持ちたちは逃げてしまっても、結局は戻ってきて再建するのではないかと思ったんです。一時的に逃げることはあっても、結局は戻ってくる。その権利を手放すことはないと思うのですが、そのあたりはいかがでしょう。

玉田 不思議なことに不動産価格は、ごく一部をのぞいて下がっていないみたいです。なぜ下がらないかと言うと「もうすぐ地下鉄の駅ができる」などと説明されます。水没地域でも、意外とバンコク郊外は上がったりしています。

です。不動産としての価値が維持される限りは、当人がたとえば香港かシンガポールに逃げたとしても、少なくともそこにある土地なり建物なりの不動産は所有していますので、完全に逃げるということはない。少なくとも経済的に引き合ううちは、金持ちは出て行かず、残っていると思います。

■ 暮らしを守るために知恵をしぼった タイの人びとのたくましさ

柴山 12月に何が起きたか、庶民の生活について、知っている部分だけお話しします。まず職業が変わりました。たとえば屋台の人は儲からないので、フローティングで物を売る仕掛けに変わった。それから、棚を吊って売る品物を載せる。あのあたりの機転のよさは非常にすばらしかった。それから企業では、フローティング・トイレを使って大もうけをするということがありました。

トンプリーで営業していたタクシーがスクムビットにきて、乗って「隣に行ってくれ」と言っても、何が何かわからない。いちいち「右に行け、左に行け」と言わなければいけない。そうしたタクシーが高速道路に相当並びましたが、水に浸かってないところで営業している。そうした通常の光景とは違う対応があちこちで見られた点では、自分の生活を守るために知恵を出す様子は、ある意味ですばらしい、そんな側面が見えたということがあります。

■ 20年後、30年後のタイを考えると たいせつなのは大企業か中小企業か

河野 日系の企業について、これは直接自分の目で見たわけではなくて、元JETROにいらっしゃった方に聞いたのですが、洪水になると、被害があった日系企

業の多くが、分散しないといかんとか、他の国に生産拠点を移すみたいな話が出て、実際にいくつかはすでに移したようです。

しかしその人がおっしゃるには、そういうことをするのは大企業だけだと。中小は動かない。それだけの資金力もないですし、そこで築いたネットワークが財産になっていますから、なんとかそこで耐えて生き続けようとしている。まさに玉田さんがおっしゃった、住んでいる人と同じようなことです。

とはいえ、大企業に出でいかれると困るので、タイ政府も日本政府も躍起になっています。しかし、その方とお話ししていたのは、5年、10年で見れば大企業に居続けてもらうことはたいせつですが、20年、30年後までのタイを考えたときに、いったいタイにとってほんとうに大切なのがどちらかということは、よく考えなければいけない。どうせ大企業は、ちょっとした条件が変われば生産拠点を世界中どこでも勝手に移すわけです。そういうものばかり追っていると、見誤るかもしれないねという話をしていました。

■ 貧乏な人たちは「やり直し」ができる一方で 中産階級の被害は甚大

片岡 やり直しという西さんのお話について、玉田先生のお話を勝手に2点補足します。1点は、ファクターとして頭に入れなければいけないのは相続税だと思うのです。たしかタイには相続税がないですよ。というわけで、階層が固定される傾向にあります。

もう一点、やり直せるのは金持ちだけだという点については、貧乏人には貧乏人のやり直しのあり方があるということも補足します。私が調査でずっと関わってきた人たちは貧乏で国籍をもっていない人が多いので、町に働きに行くとビルマ人不法就労者と同じカテゴリに入りやすい人です。うっかり捕まると身寄りのないビルマに送還されるという理不尽な目に遭うこともあるので、そういうときにはちゃんと村に帰ります。あるいは、南部のエビ田に行ってエビ養殖でこけてすってんてんになって帰って来たりします。そんなふうにしては、やり直し、やり直しをしています。

やり直しができるのは、そういった町での雇用形態が日雇いだったりして、会社をやめる覚悟とかいうこととはちょっとわけが違います。それから、すってんてんになるといってももともとの財産が少ないですから、その意味ではそういうかたちのやり直しができる。つまり階層が分かれているなかで、一方で低水準なやり直しもできるということも補足しておきます。

星川 貧乏人はやり直しがきくという片岡さんのお話と、富裕者は簡単に逃げられるという玉田先生のお話を聞いて思ったのは、その間で取り残されるのが中産階級、とくに地方からバンコクに出てきて郊外に家を買ったというような人びとです。そうした人びとが今回の洪水でもっとも被害を受けたのではないかと感じました。ですから、社会のありようが変わってそういう新しい層が出てきて大きな被害を受けたことが、今回の洪水の特徴ではないかと思います。

山本 みなさんありがとうございます。そろそろ閉会の時間になりますので、コメンテータの先生方にこれまでの議論を踏まえて一言ずつお話しただいて総合討論を閉じたいと思います。

■ 経験から学び、修正をくりかえすことが 水害との共存につながる

河野 森田さんからのコメントで、タイで工業団地ができて、技術的・自然的・社会的構築物という話がありました。たしかにそういうことを考えるのです。しかしダムの操作にしても、ぼくらは全部あとから見ているのです。これはズルなんですね。実際にその場その場でいろいろやっているわけではない。

かつて、1980年代のバンコクはミッターパーブ通り（バンコクと北部を結ぶ幹線道路）しかなかったし、ドンムアンがああ場所にありましたから、あそこに工業団地を造るというのはすごくわかる判断です。あの時点でこんなに工業団地ができるとは考えていなかったのですが、一つできてしまうと次もその近くで造ろうというくりかえしで社会が成長してきている。たぶんチャオプラヤ・デルタの洪水対策にしても、そういうものの積み重ねでしていると思います。

今回の洪水から、このやり方がだめというのではなく、最初からマスタープランがあって見事な案ができたならそれでうまくいくかということ、私は絶対にそんなことはないと思うのです。やっぱり、こうして少しずつやってみて、だめなら少し修正してということをくりかえしていかざるをえない。それが水害と人間がうまく付き合っていく方法ではないかと思います。

これまでのことを批判するより、これまでの経験から私たちは何を学べるかという態度で見えていかないといけないなど、自分自身に言い聞かせています。

■ 洪水を通して感じられた 「積み重ねること」の重要性

弘末 私も同じく、自然と人間、社会と人間との関わりについて、前近代、近代、現代をとおして見ますと、

水との付き合いのところで、やや近現代は考え方が狭くなっているのかなということを感じます。

しかし、先ほど河野先生がおっしゃったように、ひとつひとつの積み重ねをとおして、また今回の話にもありました洪水のなかでいろいろな商品、水や地元のお菓子が急に売れ出したり、あるいはフローティング・トイレの人気が出たりといったことは、コミュニティのつながりなどを考えるなかで、そういう積み重ねがやはり大事だなということを実感いたしました。

このごろ歳をとってきたせい、大学の若い学生諸君から「あなたはなんのために歴史学をやっているのですか。自己満足のためにやっているのですか」というアンケート結果をときどきもらいます。「こういう話を聞くのも大事なんだよ」と自分では開き直っておりますが、やはりこれからどう積み重ねていくかということに対して、それなりの展望やヒントを与える話を考えることの重要性を、今回のシンポジウムに参加して思いました。ありがとうございました。

片岡 今日とはとても勉強になりました。みなさんどうもありがとうございました。

速水 私も一言、「勉強になりました」と言おうと思ったのですが、最後に星川さんがおっしゃったことに補足して、同じリスクでも火災について研究された遠藤環さんがおっしゃっていることで、火災が起こったときに都市下層民の生存基盤の脆弱性および階層性をもっともはっきりと出てきたとおっしゃっていて、やはりそこにもっともひずみが行っていることは、洪水に関しても同じだと思います。

山本 どうもありがとうございました。これをもって総合討論を終わりといたします。

閉会挨拶

山本 博之

京都大学地域研究統合情報センター

本日は午前中から夕方までの長時間にわたって本ワークショップにご参加くださりましてありがとうございました。

このワークショップはもともと大学院生を中心にバンコクで企画・実施されたタイ洪水に関する研究会がもとなっていますが、その企画段階で、京都周辺にはタイ研究者がとて多いことに改めて気づきました。このワークショップについてご相談すると、最初は「自分は災害の専門家ではないので話しにくい」という反応が返ってきましたが、ワークショップではすべての報告者・討論者に災害そのものについて語っていただくのではなく、災害対応の過程で見えてくる「地域のかたち」を読み解くことも目的の一つで、そのためには災害そのものではなく政治経済や歴史分野や生態環境などのそれぞれの専門や関心に即してタイ水害とそれを巡る状況を語っていただきたいと企画意図をお話したところ、みなさんご快諾くださり、このようにさまざまな専門性や関心をもとに各方面から検討するワークショップを実施することができました。

このワークショップは、先ほども言いましたようにもともとバンコクで大学院生が中心になって実施された研究会をもとに企画されたものですが、京都側で企画の中心となったのは私と同僚の西芳実さんです。どちらもインドネシアのスマトラの災害対応の調査に関わり、インドネシアの事例研究を深めるだけでなく、そこから得られた知見を他の地域や他の専門性にも適用可能なかたちにして示すにはどうすればよいかを考えてきました。

このことは、私が所属している地域研究統合情報センターで取り組んでいる地域研究のあり方とも密接に関わっています。西さんも私もタイに関してはまったくの素人ですが、それにもかかわらずタイ洪水の研究会を企画したことにはこのような背景がありまし

た。本ワークショップのこのような背景が、タイ水害に対する理解を深めるとともに、タイ水害に表われる「地域のかたち」を読み解く議論を深めることに少しでも貢献できていれば幸いです。

第1セッションから第3セッションまでの三つのセッションでは、それぞれの専門性に即してタイの洪水をどう捉えるか、そして洪水を踏まえてタイ社会をどう捉えるかについてたいへん多くのことを勉強させていただきました。また、総合討論では、タイ社会のかたちを十分に明らかにするまで議論が尽くされたわけではありませんが、災害を契機に表われるタイ社会のかたちを捉えようとする試みとしては一定の方向づけが得られたように思っています。これを始まりとして、今後さらに議論が深まる機会が作れればと思っています。

報告者、討論者、参加者のみなさん、そしてこのワークショップの開催を支えてくださった京都大学地域研究統合情報センターのスタッフのみなさんにもお礼を申しあげて、本日のワークショップを終わりにさせていただきます。みなさんどうもありがとうございました。